

所信表明

二〇二五年度中央事務局長選挙所信表明

中央事務局長区分の立候補者は二名です（定数一名）

中央事務局長候補①

文学部 四回生

白井 岳歩（しらい がくほ）

二〇二五年度中央事務局長に立候補しました、文学部四回生の白井です。この所信表明では、二つの観点——「学園共創活動」と「学友会活動の透明化」——を中心に議論を展開し、従来の枠組みを問い直していきたいと思えます。

そもそも、「共創」という概念が何を指し示しているのか、その本質的な曖昧さと同調性について私たちは今、直視せざるを得ないのではないのでしょうか。

たとえば、シャトルバス減便問題。この一件が「共創」の実効性に疑義を投げかけていることは明らかでしょう。ここで問われるのは、共創という理想が、果たして実際の意思決定にどのように作用するべきなのかという点です。大学側が意思決定において優位的な立場に立ち、学友会が後手に回って対応するという構図を私は眼の当たりにしました。これはむしろ、共創が目指すはずの協働的関係の転倒された在り方を象徴しているのではないのでしょうか。

しかし、この「転倒」からは、共創の失敗ではなく、むしろ、共創の新たな可能性を見出せると私は考えています。

共創とは、単に大学側の決定を受け入れるのではなく、対話の中で異なる立場が交錯し、新たな地平を開く営為です。この「開かれた不確定性」の中にこそ、私たちが求める共創の未来が潜んでいるのではないのでしょうか。

シャトルバスの事例においては、学友会がアンケートを実施し、後手的ではあるものの、その過程で学生たちが「声を上げる」ことができました。これはまさに、共創がいかにして実現されるべきかを再考する機会でした。

さらには、この事例が「要求実現運動」の重要性を再び浮上させたということも指摘せざるをえません。対話や協働だけではもはや立ち行かない場面というのは、往々にして現実中存在します。学生の具体的な要求を掲げ、実効性ある交渉を通じて大学側に対して意思を示す必要があるのです。

ここで重要なのは、「要求」という概念自体が、私たちの主体性を形作り、共創の本質を再定義する契機として機能するということです。共創とは受動的な関係ではなく、相互作用的で生成的なプロセスであるべきです。それこそがこの「理念」を「現実」へと具現化する道筋なのではないのでしょうか。

次に、自治活動の透明性という問題について触れたいと思います。透明性の欠如、情報が断片化され、不均等に流通する現状は、学生と自治組織との信頼を侵食しているのではないのでしょうか。議事録の公開方法を見直すこと、そして情報を平等に共有すること——透明性は、もはや単なる手段ではなく、共創の新たな理論的枠組みとして私たちを導いてくれるはずです。

また、学生団体支援と審査の問題も、単なるプロセスの効率化という議論の枠組み

を超えた視点で捉えるべきです。デジタル化による迅速な対応の必要性は認めつつも、それはあくまで部分的な解決に過ぎないということもまた認識しなければなりません。学内エンゲージメントの新しい地図を描くための核心的なステップとなるのは、むしろ、学生団体同士の横断的な協力と情報共有を促進する場の構築です。そうした柔軟で効果的な支援を行う役割を学友会が担うことで、学生全体の自己表現と自治意識が大学内で飛躍的に花開く、そんな未来が開かれるでしょう。

最後に、今回のシャトルバス問題を振り返ると、それは共創という理念が単なるスローガンに留まるか、それとも新たな実践へと進化するかを試す試金石であったように思います。共創は、その本質において固定的ではなく、動的な生成プロセスです。それゆえ、私たち一人一人がその構成員として、学友会が意思決定に適切に学生の声を反映できるプロセスを再構築する必要があります。その過程を共に歩む姿勢こそ、未来の学園を創造するための鍵となるのではないのでしょうか。

以上

次のページより二人目の候補者による所信表明を掲載しています。

併せてご確認ください。

中央事務局局長候補②

文学部 三回生

高木隼大（たかぎ はやと）

この度、2025年度中央事務局長に立候補いたしました、文学部・日本史研究学域
日本史学専攻^ω回生の高木隼大と申します。

これまでの主な学友会での経歴といたしましては、一回生時に文学部自治会会計、
^ω回生時に文学部自治会副委員長と財務部員、^ω回生時に財務部長と文学部自治会副
委員長を務めておりました。

この所信表明では、私のこれまでの財務部における活動と来年度の中央事務局の方
針について述べさせていただきます。

【これまでの財務部における活動】

私が財務部入部したのは一回生の12月でした。当時の私は文学部自治会会計と
して活動をしておりました。当時の文学部自治会委員長に勧められ中央委員会の傍聴
をほぼ欠かさず行ったり、三役が参加できる大学との懇談会の場へ参加したり、中央
パトリリーダーズキャンプに参加したりするなど学友会での様々な活動や部署に触
れ、そこで活躍する多くの方々にお会いしました。そのような中で文学部自治会以外
に自分の活動の場を広げたい、誰かのために活動したいという思いが芽生えるよう
になりました。そこで、自治会の会計としての経験を活かせる財務部に興味を持ち、入
部をしました。

財務部への入部は私の大きな転機となりました。入部した時の財務部は先々代の財務部長から先代の財務部長へ世代交代がなされたときでした。当時は部員が少なく、効率よく決算の監査を行えている状態ではありませんでした。そのため、監査の遅滞が発生し、学友会費の援助を受けている中央パート団体ならびに公認団体に多大なるご不便をおかけしておりました。そこで、団体に対して迷惑をかけることはあつてはならないと監査を率先して行い、財務部における監査の遅滞を減らすことができました。また、2023年度は2022年度の課題であった年度末に決算が溜まる事態を阻止すべく、公認団体の監査を行う課外本部との連携強化や決算の提出期限の設定に取り組みました。加えて、団体への知識の共有などを充実させるために質問会の実施やガイダンスの内容の充実を図りました。これらの成果として、年度末の決算数は2022年度に比べ大幅に改善され、決算の質も向上しました。

私は財務部長として上記の業務を引き継ぎ、より一層発展させてまいりました。2023年度から継続して行ったこととして、課外本部との連携と決算の質の向上に向けた取り組みがあります。課外本部との連携に関して2023年度に残った課題として、通年の連携ができていなかったことがあげられます。その結果、監査の遅滞が見られる時期もございました。そこで、私は会計年度が変わる4月までに各課外本部とそれぞれ話し合いの場を設け、監査の Spann や方法について議論させていただきました。また、各課外本部の代表や会計担当者と密に連携を取り、大きな監査の遅滞を無くすことができました。加えて、決算の質の向上に関して、2023年度に引き続き、月末の質問会の実施やガイダンス資料に写真を用いてより分かりやすいものを制作する

ことに努めました。

この2023年度からの既存の業務の引継ぎや発展だけでなく新たな取り組みも行いました。一つ目が証憑原本（以下、原本とする）提出ならびに差し戻し決算の再提出締切日を設けたことです。これまでの課題として原本の提出や差し戻し決算の再提出に遅滞が見られることがあり、年度末における決算の処理件数が多くなる原因となっていました。先述の通り、2023年度は2022年度と比較して年度末に溜まる決算数に改善が見られておりました。一方で、原本の提出や差し戻し決算の再提出に遅滞が見られることがあり、年度末における決算の処理件数が多くなっておりました。そこで、半年ごとに原本提出の締切日と差し戻し決算の再提出締切日を設けることとしました。8月までに原本提出段階ならびに差し戻しとなった決算の提出締切日を6月末としたのですが、原本提出に関しては、該当決算のほとんどを締め切りまでにご提出いただきました。これは年度末に残る決算を削減できただけでなく、団体への返金が早く行われるという利点にも繋がります。これは年度末に残る決算の件数を削減し、会計処理の業務改善ができただけではなく、団体への返金が早く行われるという利点にも繋がります。団体へ迅速な返金をするにより、個人が一度に負担する金額を減らすことができ、新たな活動をするにあたっての立替の負担軽減になることが期待できます。言い換えれば、負担を軽減することにより、新たな活動をするためのハードルを下げることで、団体活動の発展に繋がるということです。今回の取り組みは、中央事務局の活動により団体・学友会員へプラスの影響をもたらす、いわゆる「還元」を行った一つの例になると考えています。

2つ目は立命館大学学友会所属課外団体連絡会（以下、課外連絡会とする）の実施です。課外連絡会は中央事務局と課外本部で協力し、全学友会所属団体向けに実施したものです。学友会所属団体への情報共有の強化や学友会所属団体が持つ義務や権利について改めて知っていただく場として、私が提案した企画になります。中央事務局からは学友会費や継続審査、新歓・学祭についてなど団体にとって非常に重要な情報を共有しました。財務部は学友会費や決算の提出締め切り日などの説明を行いました。特に、学友会費という全学部生から徴収された公金を扱うことに対する責任や義務についてお伝えしました。課外連絡会の実施は、団体に対して必要な情報を共有できただけでなく、共有すべき情報を整理するために中央事務局の各部署が各々の業務を見つめなおす機会となりました。

【中央事務局の方針】

私が2025年度の中央事務局の方針として、①中央事務局の業務の見つめなおし②今まで以上に発展した団体支援③人材確保の3点を掲げます。

①中央事務局の業務の見つめなおし

中央事務局は現状、3部3室の計の部署がそれぞれ活動を行っています。3部3室はそれぞれ、学友会費が適切に運用されているかを監査し、学友会費の面から団体支援を行う財務部、全面的な課外活動支援や中央事務局の全体的な総務を担う調査企画部、新歓や学園祭といった全学行事の実務を担当する特別事業部、学友会の二言語化

を推し進めるグローバル化推進室、新しいことを企画し実施する戦略企画室、そして新設された学友会の広報を担う広報室になります。

各部署の活動を一言でまとめるとこのようになりますが、個別的に業務を挙げていくとかなりの業務を各部署が抱えています。しかし、業務を数多く抱える中で本来の業務やその意義・目的の理解が疎かになっているのではと考えています。中央事務局が行う業務は最終的には学部生に還元されるものであります。しかし、それぞれが活動の意義や目的を理解できていないということは本来求められている業務があまりできていないということではないでしょうか。中央事務局の活動のウラには学部生がいるということは今一度理解し、業務を見つめなおし、責任感をもって業務に勤しんでもらいたいと考えています。

そのために、中央事務局研修の実施と各部長・室長との密なコミュニケーションを行いたいと考えています。中央事務局研修について、中央事務局研修で各部署の方針や業務の意図・目的について説明を行いたいと思っています。これを実施することで、局員が他の部署のことを理解するだけでなく、各部署がその部署の活動の整理や見直しができると思います。また、中央事務局とは何なのかについても考えてもらう時間を設けたいです。中央事務局の業務は「学友会の事務・実務機関」であるといわれます。しかし、この言葉で中央事務局の業務を全て理解している局員はあまり多くはないのではないでしょうか。そこで、各部署の業務だけでなく中央事務局全体の業務についても考えて欲しいと思います。

各部長・室長との密なコミュニケーションについて、当たり前ですが、局長は中央

事務局を統括する身ですので各部署との密なコミュニケーションは必要不可欠です。しかし、常にすべての局員とコミュニケーションを取るのとは不可能でしょう。そこで、各部長や室長とコミュニケーションをとる中で業務の在り方や目的・意義について各部長・室長と考えていきたいと思えます。

②今まで以上に発展した団体支援

中央事務局において、最も重要な業務が団体支援であると考えています。中央事務局では学友会費の適切な運用やサークルコレクションの発行、全学行事における活動発表の場の創出などをはじめとする団体支援を行っています。しかし、より一層の団体支援の在り方を問う必要があるのではないかと考えています。理由を一言で申しますと、団体の活動がより活発化しているからです。コロナ禍では団体の活動が制限されたり、部員がなかなか確保できなかつたり、活動が制限されていたかと思えます。それが、コロナ禍が明け大きく変化し、活動の制限解除や部員の増加による活動の発展がなされています。これは、私が財務部として団体に予算ヒアリングを行った際に部員増加や活動規模の増加に伴う支援の拡充を求めるところで感じたものであります。団体の活動がコロナ禍から大きく変化している以上、団体支援の在り方も大きく変化させていく必要があります。

そこで、課外本部と協力し合い、よりよい団体支援の在り方を追い求め実行に移したいと考えています。団体支援は中央事務局だけでなく、課外本部も行います。課外本部は公認団体・同好会・任意団体を統括しており、団体の事情を把握した支援を行

っているかと思えます。中央事務局と課外本部がお互いに協力し合い、団体目線に立ち、より団体に寄り添った団体支援を行いたいと考えております。

また、お互いが協力するために中央事務局と課外本部で定期的なミーティングの実施を考えており、現段階で準備を進めております。ミーティングではお互いに情報共有を行ったり、よりよい団体支援について議論したりしたいと考えております。

③人材確保

学友会の大きな課題である人材確保は、もちろん、中央事務局においても課題です。人材確保が課題ということは即ち人材不足であり、それは一人当たりの負担が増えることを意味します。一人当たりの負担が増えることは、本来行うべき業務が疎かになる、正課との両立が困難になるなどの弊害のオンパレードとなります。したがって、例年課題となっている人材確保について、私は優先度を引き上げ、早急な解決を目指したいと考えております。

人材確保を行うために、広報室を中心とする新たな広報戦略を策定したいと考えております。人材不足の一つとして理由として考えられるのが、中央事務局の宣伝を新歓期にあまり行っていないためであると考えます。例年、多くの中央パート団体はビラの作成や各広報媒体での情宣を行っています。またここ〇年間には中央パートブースでの宣伝が行われています。しかし、新歓期における中央事務局の情宣は中央パートブースやサークルコレクション、中央パート説明会のみです。広報機会の少なさを中央事務局を知ってもらう機会が少ないことが人材不足の要因のひとつでしょう。

来年度は広報室を中心とし、各広報媒体やビラによる情宣を行い、中央事務局を知ってもらおう機会を創出し人材確保に努めてまいります。

【さいごに】

私が学友会の活動において、最も重要視していることを述べさせていただきます。それは「還元」です。学友会の活動は全学部生から徴収された学友会費を資本に活動を行っております。ですから、私たちには学部生に「還元」をする義務と責任があります。私は中央事務局長に選ばれた場合もその「還元」を常に考え、精一杯活動をしてまいります。

投開票日 二〇二四年一月二日

二〇二四年度立命館大学学友会中央選挙管理委員会